リレー随筆

Emotional support ～doing と being～

かみや母と子のクリニック
小児科　神谷　鏡子

そもそも医師会のリレー随筆などという大それた件を何気なしに承諾しまった私に責任があるのですが・・・最近あった出来事といえば・・・そうそう・・・私達診療所は産婦人科、小児科を一緒に開業しているものですから、専門の先生方にはお分かりでしょうが、周産期という考え方で、妊娠中のケアから分娩、そして子育てという母子をともに支援したいと考えて日々の医療に励んでおりますが・・・その中で当院が重要と考えているのは母と子の絆です。実は私はこの話は国立岡山病院小児科で有名だった故Y先生の講演を聴いたのがきっかけでした。それは私が長男を生んで2ヶ月ごろだったかな？とおもっていますが・・・小児科地方会の特別講演で先生のお話をきいて、私は自身が小児科医として母親として失格かな？と思った内容でした。そのころは研修後数年でしたから、疾病の勉強ばかりしていましたので、先生の講演は小児科医を超えて人間のすばらしさ、それにかかわる小児科医、産婦人科医の重要性とその役割、そして人間として支えあう人と人との関係の基礎づくりが出生時から始まるというものでした。母子の早期接触、母乳育児を通した母子関係の重要性を強調なされていました。

ところで皆様、BFHという言葉をご存知でしょうか？産婦人科、小児科の先生は一度どこかで聞かれたことがあるかもしれません。BFHは、Baby Friendly Hospitalの略で、1989年、WHOとユニセフの共同声明として発表された「母乳育児成功のための10か条」を積極的に実践している産科施設であり、「赤ちゃんにやさしい病院」として認定をうけるものです。全国に30施設くらいあります。日本の母乳育児の実態は第2次世界大戦後、急に母乳率は低下し1979年代は1ヶ月検診で15％と最低だったそうです。事実、開発途上国にも人工乳が安全であり栄養も十分であるとの乳業会社の宣伝により母乳より人工乳が勝っていると宣伝された結果、開発途上国でおきた感染症蔓延による悲惨な結果はCunninghamの論文にかかれています。人類がその天からの賜物である母乳を捨て去ろうとした愚挙に対して天が怒ったとしか考えられません。その犠牲に対してWHOやユニセフが危機感をもってその対策に乗り出しました。その一環として母乳育児の重要性を全世界に訴えるため、この10か条を推進し、1991年からBFHの認定を始めました。

現在、BFHは日本母乳の会がユニセフから委託業務され認定にあたっています。

ところで前おきが長くなりましたが、先日、この選定委員会の方々が当院の審査にいらっしゃいました。日本の新生児医療を担っている聖S病院の母子総合医療センターの先生やある周産期センターの先生など日本の母乳のトップレベルの先生方でした。審査とは現在の当院の母乳率、各スタッフ間の勉強内容などが評価され、さらに患者さんにも面接があり、なかなか厳しいものでした。さすがに久々国家試験並みに緊張しましたが、まだ国家試験の方が傾向と対策があり、楽だったかな？と思いました。母乳育児を推進するうえでの重要なポイントがいくつかありますが、母と子の早期接触（カンガルーケア）、早期授乳、母児同室、実はどれも自宅分娩では当たり前のことですが、現在は意識しなければ母乳育児が困難であるということはとても悲しいことです。その中でどうやって良い母子関係をうまく築くかが人間の基本的信頼関係の土台作りです。これを支えるのに最も重要なのは、技術でもなければ知識でもなくemotionalなsupportです。

Emotional supportとは精神的支援、やさしい勇気づけです。私達が医学部の勉強をした頃は、必須教科に心理学はあったかどうかは？は

っきりいって覚えていません。ところが、臨床医になって初めてどんなことにも精神的な支援がいかに必要かが身にしみてわかるようになりました。昔から「医は仁術？」といわれる所以かな？と思います。母子関係を築く第1歩として母乳育児があります。出産後2、3日までは母親の不安が強く、「頑張れ」など、叱咤激励の言葉は禁句です。どんなお母さんも子供のために一生懸命頑張っているのですからこれ以上は頑張れません。このつらい時期に母親の気持ちに寄り添い、いろいろな感情を母親と共有すること、良い聞き手になることこれだけで母親は驚くほど前向きになり自分でそれを乗り越えていきます。ある臨床心理士の人の話の中で、supportには何かをするという「doing」と寄り添うという「being」の2つがあるそうです。サポートとは何かをしなければならないと思いがちで特に医療者はこの「doing」がメインのような気がします。事実今までは何かをしてあげなくてはと考えていましたが、それも大切かもしれませんが、常に傍らに存在する、寄り添う「being」も重要であるということです。これは医師じゃなくてもいいかもしれませんが、まだまだ医師になって○年？未熟者！修行が足りないなあ？と最近つくづく感じている今日この頃です。

★リレー状況

－平成14年以前掲載省略－

17. 西平守樹先生（西平医院）Vol. 39 No. 2
18. 澤口昭一先生（琉球大学医学部眼科学講座）Vol. 39 No. 3
19. 安里良盛先生（安里眼科）Vol. 39 No. 5
20. 照屋　勉先生（てるや整形外科）Vol. 39 No. 6
21. 国吉　毅先生（南部徳洲会病院）Vol. 39 No. 9
22. 吉川朝昭先生（西崎病院）Vol. 39 No. 11
23. 濱崎直人先生（沖縄リハビリテーションセンター病院）Vol. 40 No. 1
24. 永山盛隆先生（豊見城中央病院整形外科）Vol. 40 No. 2
25. 武内正典先生（武内整形外科）Vol. 40 No. 5
26. 長嶺功一先生（前県立那覇病院長）Vol. 40 No. 7
27. 奥島憲彦先生（ハートライフ病院）Vol. 40 No. 10
28. 豊見山直樹先生（那覇市立病院）Vol. 40 No. 12
29. 仲間　司先生（県立那覇病院）Vol. 41 No.5
30. 新里　譲先生（沖縄赤十字病院）Vol. 41 No.11
31. 友利正行先生（ともり内科循環器科）Vol. 42 No.2
32. 具志一男先生（ぐしこどもクリニック）Vol. 42 No.4
33. 古謝　淳先生（医療法人陽和会 難産病院）Vol. 42 No.5